帆

矢島昂

海のことを考えると、古代ギリシャの伶人アリーオーンの物語が思い浮ぶ。この物語は、同じ様に歌の力を扱ったオルペウスの物語ほど知られてはいないけれども、シュレーゲルの書いたものをブルフィンチが英語に訳し、それを又野上弥生子さんが訳して、岩波文庫で読むことができる。

アリーオーンは、コリントス王ペリアンドロスの宮廷に住まっていたが、ある時、シケリアで行なわれたコンクールに出、名声をさらに高め、かつ多くの賞品を得た。コリントスへ帰る船旅の途中、その賞を目当てにした水夫達に殺されようとした時、彼は、暫くの猶予を求めて衣服を改め、死に望む歌をうたった後に、海に身を投じた。けれども歌の力は大きく、音楽を慕って集まって来た海豚(いるか)の背にのせられて、彼は無事にコリントスへ帰り着く事が出来た。一部始終を聞いたペリアンドロスは水夫達を呼び出し、彼等は罪を認めざるを得なかったが、アリーオーンの乞いによって命を救われた、と言うのがそのあらすじだ。

こんな風にすると、もとの物語の香気が抜けてしまって残念だけれども、オルペウスの原神話風の悲惨な最後に較べて、この物語の明るさはどうだろう。ギリシャ神話の中では、殆んど何時でも荒らびた相貌を見せる海が、ここでは珍しく穏やかに微笑んでいる。この海を、古典古代風の、と呼んだらいけないだろうか。

鹿児島に居た頃、一年に満たない短い期間だったけれども、友人と共同で、小さなヨットを持っていたことがある。鹿児島湾

は、その為にはとても良い所で、風も波も外洋に較べれば遙かに穏やかだったし、帆走の目的地になってくれるような小さな島もいくつか有った。ぼくたちが艇を舫っていた磯公園のすぐ前の浜から、対岸の桜島までは、順風ならば三十分程で行くことができ、ぼくたちは、無人島のつもりのその浜で、誰が飲みものを買いに近くの店まで上ってゆくか、よくジャンケンで決めたものだ。

こうした帆走の合間に、一度、海豚の群に出会ったことがある。海豚はよく船に従いてくると言われているけれども、彼等は、ぼくたちの小さな艇には興味も無いのか、そばへ寄ってゆくと、サッと潜っては、とんでもない遠くに浮び上るのだった。ぼくたちの誰でもいい、アリーオーンの様に歌えたら良かったのだが。

こんな風に、海は今でも、明るく穏やかな姿でぼくのイメージの中に残っているが、だからと言って、天気の良い日にだけ帆走に出ていた訳でもない。台風の来る前日に強風の中に乗り出し、いつもなら二人で操れる艇に、三人で乗っても傾きを抑えることが出来ず、ずぶ濡れになったこともあるし、突風の風下に桜島の溶岸地帯を控えて、生命の危険は無いまでも、艇を駄目にしてしまいそうになったこともある。ぼくたちは、誰一人として正式にヨットを習ったことが無かったから、そんな時には、本に書いてある事を、できる限り状況に合わせて応用するしか方法がなかった。それでも、一度も転覆したりせずに、歩くのも嫌な程疲れきりながらも元の岸に戻って来られたのは、海がぼくたちに優しかったからにちがいない。

ぼくたちが、怖しさと忙しさとに自分からのめり込んでゆかない限り、海はぼくたちに優しかった。ぼくたちは、自分の賢さを信じることなどできはしなかったけれども、帆をどの様に張ったら艇を前に出せるか試してみることはでき、そして、そうする事が、むしろ楽しくさえ思えたものだ。そんな時、海は、ぼくたちには想像もつかない怖しい現象を持って、ぼくたちを滅そうとしているものではなく、自らの法則に着実に従おうとしている様だった。この海を、古典古代風の、と呼んだらいけないだろうか。

こうした考えは、海を仕事の場にしているのではないアマチュアのヨット乗りの、その中でもさらに海を知らないぼくの抱く、ごく卑少なものにすぎないのかもしれない。けれども、ぼくの中で、海は、いつでも明るく穏やかに、白い帆を滑らせて光っている。

（国学院大学）